
ハンコくださいっ！

楽山やくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンコくさいっ！

【Nコード】

N3721Z

【作者名】

楽山やくら

【あらすじ】

それぞれ異なる理由から、魔符術学校を卒業できない危機に立たされているリユーイとロディナ。そんなふたりに校長先生が与えた最後のチャンスは、協力して『いちばん強い魔符術』をつくりだすこと！ しかし、正反対の性格を持つふたりは早々にケンカ別れをしてしまつて……！？ まっすぐな少女と捻くれた少女の友情×魔符術ファンタジー。

『ブローグ』癒しの大樹にて

セルミア魔符術学校の中庭には、なんの根拠もなく『癒しの大樹』と呼ばれている老木がある。

テストの点が悪かったり、通知表の評価が低かったり、先生から叱られたりしてかなしみのどん底にいる生徒たちが、一方的にその木に話しかけることによって、勝手にストレスを解消して去っていくんだ。

別に、木がなにかをしてくれるわけじゃない。

けれど、なぜか自然と足が向いてしまう。

学年順位では明らかに下から数えたほうが早いあたし——リユー・イルーンも、そういう生徒のひとりだった。

（常々やばいやばいとは言われてきたけど、まさか卒業までやばいなんて！）

まったく、自分で自分に呆れるよ……。

さつき先生から聞かされたばかりの衝撃的な事実に頭を抱えながら、あたしは今日も『癒しの大樹』へと向かっていた。

廊下を歩くその足取りがいつもよりずっと速かったのは、それが絶対にあってはならないことだったからだ。

（これじゃあ、ギヒシー（パパ）とバートチャ（ママ）が帰ってきても顔向けできないよ）

あたしの両親は高名な言語学者だった。しかも専攻は、古代語。それははるか昔に使われていた言語で、魔力のない者が魔術を行使するための『魔符』をつくるには欠かせない要素だった。当然このセルミア魔符術学校でも、いちばん力を入れて教えられていた。

そしてやっぱり当然、古代語の専門家を両親に持つあたしは期待され。

その期待を——ことごとく裏切りつづけてきたんだ。

（単語力だけなら誰にも負けないのに……！）

赤ちゃんの頃から、なにか言葉を覚えるときは現代語と古代語をセットで覚えさせられてきた。両親を呼ぶときも古代語で呼んでいくくらいだ。だからあたしは、他の人がまったく知らないような、どうでもいい単語までたくさん覚えていた。

おそらく、きっと、それらがあたしの脳みそのほとんどを占めてしまっているんだろう。

この学校に入ってから教えられた古代語の文法は、少しも頭の中に入っていないで、あたしはうまく文章を組み立てることができなかった。テストのときには毎回、単語問題の点数しか取れなかった。

（情けなかった）

両親が単語しか教えてくれなかったからなんて、理由にならない。ちようど文法を教えはじめようとしていたその頃、急にいなくなってしまったなんて――

「……あっ、ごめんなさい！」

早足で歩いていくせに考えごとをしていたせいで、他の生徒とぶつかってしまった。立ちどまったあたしが慌てて謝ると、

「ぼーっとしながら歩くなよ、バーカ」

男子生徒はそう罵倒して、あたしの横をすり抜けていく。

（――ほんと、バカだな）

そのあいだにも脳裏に浮かぶのは、両親のやさしい笑顔。その目尻が少しずつりあがっていくのを想像して、あたしはぶんぶん頭を振った。後頭部に高く結っている髪の毛も、一緒に揺れて否定する。

（ダメっ、たとえ頭のなかでだってこんな顔させられない！　なんとかしなきゃ――）

焦燥感があたしの心を支配して、再び歩きはじめた。中庭への出入り口はもうすぐそこだ。

（なんとかして、卒業しないと！）

必死の思いで、足を動かす。

そこに行けば、きっと落ちつける。

そうしたらなにか、妙案が浮かぶかもしれない。

あたしは期待していた。

常連の仲間がいたら相談してみようなんて、考えてもいた。

けれどその日、強い風にあおられ緑の葉が舞い飛ぶなか、さらりと長い黒髪をなびかせて立っていたのは――絶対にそこにいるはずのない人物だった。

「！ あ、あなたは……」

発見したとき、息を呑んだ。あたしはそれ以上言葉を続けられない。

それが誰なのかは、知っていた。

彼女は学校始まって以来の天才として有名だったから。

それに、あたしと彼女はとある理由で周りから勝手な比較をされていたんだ。

あたしは、『成績が悪いほうのルーン』と。

そして彼女は、『成績が良いほうのルーン』と。

そう、彼女の名はロディナ＝ルーン。

名字が同じだけの、赤の他人だ。

当然お互い存在は認識していたけど、まだ直接話をしたことはなかった。

（なんで彼女がここに！？）

天才なら、こんな場所に用事なんかないはずだ。まさか、からかいにでも来たの？

あたしはかける言葉を見つけれなかった。思いがけないロディナの登場に動揺し、見つめるのが精一杯。

そしてそんなあたしを、ロディナも見つめ返してくるだけだった。向こうから話し出す様子もない。

（変なの……でも、やっぱり美人だな）

こんな状況下なのに、あたしはつい見とれてしまう。

そう、ロディナが有名だったのは、なにも頭が良いからだけじゃ

なかった。あたしとは違って、切れ長の大人っぽい目に、形の良い上品な鼻、柔らかそうな厚い唇。おまけに、制服のスカートからスラリと伸びた長い脚が、まるであたしと年齢差があるかのように見せていたけど、安易に比較されるところからもわかるとおり、あたしとロディナは同じ十六歳だった。

あたしは密かに、彼女に憧れていた。

だからこそ簡単には、言葉が続けられなかったんだ。

「――あ、あのっ」

それでもなんとか選り出し、自分が焦っていたことも忘れて、あたしは口を動かす。

「ここに来るってことは、もしかして、なにか嫌なことでもあったの？」

（成績では用のない彼女でも、それ以外のことでなら）

なにかつらいことがあったのかもしれない。

そう思って訊いてみたけど、ロディナは相変わらずあたしを見返すだけで、息を吸う素振りも見せない。それどころかやがて、すいと顔を背けて幹のほうを向いてしまった。

（あれえ？）

その背中が、すべての問いを拒絶しているように見えた。

（なにか悪いこと訊いちゃったかな……）

予想外の反応に、戸惑ったあたしはそっと手を握りこむ。

もし悩みがあるのなら、誰かに話すだけでもすつきりすることがあるんだ。それは相手が本であっても有効なことだけど、人間であれば当然もっと効果が高いもの。あたしはこれまでそうやって何度も、仲間に助けられてきた。

励まされてきた。

（でもロディナは、ひとりのほうがいいのかな）

ひとりになりたくて、ここに来たのかな。

それなら――

（常連のあたしが、譲ってあげなくちゃ）

ロディナがここを訪れるのは、これが最初で最後になるのかもしれない。それなら、情けないことに今後もお世話になりそうなあたしが、今無理に邪魔することもないんだ。

まだ動かないロディナの背中に、決心したあたしは足を動かそうとした。

——そのときだった。

「リユーイ！ やっぱここにいたかつ」

突然の声に振り返ると、校舎の出入り口から走ってくる人影があった。

「げっ、ジノラット」

シルエットだけでも簡単に誰だかわかりそうなツンツン頭のそいつは、あたしの幼なじみ・ジノラットⅡダクシャン。あまりにもやんちゃが過ぎて、いつも身体のどこかに包帯を巻いている。本人は「ファッションだ！」と言い張っているけど、絶対に違うとあたしは思っていた。

「『げっ』ってなんだよ『げっ』って」

今日は左の二の腕のあたりに包帯を巻いているジノラットが、あたしから一步離れた位置でとまると、まずはあいさつがわりの口ゲンカ。

「だって、あんたが来ると話が長くなるんだもの」

「なんだとー？ それはおまえが話をややこしく——」

でもそれがあっさり途中で終わったのは、ジノラットの視線があたしを通り越したからだった。

（？ ……ああ、後ろのロディナに気づいたのね）

さっきのあたしみたいに、ジノラットも見事に固まっている。ついでに頭の前からどんどん赤くなっていって、やがて口をパクパクしはじめた。

（まったく、ジノラットったらわかりやすいんだから）

そう、ジノラットはあたしとはまた違う意味で、ロディナに憧れていた。

「な、な、な、なんで……なんでっ、ロディナがここにいるんだよ!?」

「あたしに訊かないでよ。それよりどう? 『覗き屋ジノラット』くん。双眼鏡じゃなくて裸眼でロディナを見た感想は!」

「うわあああ、なに言っちゃってんだよっ、聞こえる聞こえる!!」
焦ったジノラットは、素早い動作であたしと身体を入れ替えると、通せんぼするように両手を広げた。もしロディナが振り返っても、常に首から提げている双眼鏡を見られないようにしたかったんだろ
う。

「あたしのこと、いつも『成績が悪いほう』ってバカにしてくれるから、お返しよ!」

「く……っ」

あたしが両足を広げ胸を張って告げると、ジノラットは文句を言いたそうに眉をひそめたけど、それでも後ろにロディナがいるからなのか、口をひらくことはなかった。

(よしっ、今日は早く切りあげられそう)

あたしは心のなかでほっと息をつく。なにしろ、こんなところで時間を使っている場合ではないんだ。『癒しの大樹』をロディナに貸している以上、他に落ちつける場所を探す必要があった。

「で? あたしになんの用?」

「あ、そうだった!」

促してみると、ジノラットはぽんと手を叩く。

「俺、一応おまえに良い話持ってきたんだぞ……なんか癪だけど、まあいいか」

そう前置きしてから。

「卒業が危ういおまえに朗報だ! なんでも、国王陛下が『いちばん強い魔符術』を欲しがっているらしい。それをつくれたら、願いごとをひとつ叶えてくれるってよ!」

「えっ!？」

「——それ、本当?」

(！)

驚きの声をあげたのはあたし。でもそれに続けたのは、意外にもロディナだった。

太い幹の前で、ロディナはいつの間にかこちらを向いていて――その瞳は、息を呑むほどに真剣そのものだ。

「あ、あの……？」

それだけ返すので精一杯なジノラットの声は、乾いてガラガラだ。ロディナはその返答に不満だったのか、ツカツカとジノラットに近づきその両肩をつかまえると。

「その話は本当かと訊いているの。どうなの？」

「は、はいっ！ 本当ですっ。この学校からも挑戦者を募るって、さっき校長先生が城の人と一緒にポスターを貼ってましたっ！！」
骨のない人形のように首を振りながら、ところどころ豪快に声をひっくり返らせながら、ジノラットは一生懸命に答えた。

「そう――」

それを聞いたロディナは一言呟くと、そのままぐいとジノラットを押しつけて、校舎のなかへと走って行ってしまった。

(どこか様子が変だわ)

そこにいたさっきまでは、むしろ落ちつきすぎるほどだったのに。(やっぱりなにかあったの？)

心配になったあたしは、ロディナを追いかけてようと地面を蹴った。
「あっ、リ्यूーイ！？」

すると押し倒されて地面に座りこんでいたジノラットが声をかけてきたから、一瞬だけ立ちどまって。

「校長室よ！」

「来る気があるなら来なさい」という意味をこめて、言葉の置き土産を投げてから再び走り出す。

(そう、きつと校長室。だってロディナ、さっきの話に興味がありそうだったもの！)

国王陛下が願いを叶えてくれるという、まるでおとぎ話のような

話に。卒業がかかっているあたし以上の興味を持って、ロディナは食いついていた。

（なにか叶えたいことがあるの？）

だから、『癒しの大樹』に来ていた？

ロディナほどの人物が、一体なにを望む？

あたしは気になった。

半分くらいは羨望で、半分くらいは僻みだったかもしれない。

授業が終わってからしばらく経っているため、ほとんど人の気配のない校舎のなかを、ばたばたと駆け抜ける。そのたびに床板はひどく軋み、建物全体が少し揺れたけど気にしない。築百年の木造校舎を心配するよりも、ロディナの秘密（？）が知りたかった。

いつも比べられてきた。

いつも、憧れていた。

ああなりたいたと思っていた。

そんな相手が、心に抱える悩みってなに……？

目的の校長室は、校舎のいちばん奥にある。たどり着いた頃には息が切れていた。

「――校長先生！」

それでもそのまま校長室に飛びこむと、そこにはやはりロディナの姿があった。

あたしを振り返ったロディナは、大きく目を見ひらいていて。それとは対照的に、校長先生は変わらず穏やかな笑顔を浮かべていた。ふんと、大人の男性がよく使う整髪料のにおいが漂う校長室内に、校長先生の低い声音がやさしく響く。

「リ्यूイさん、あなたもこの話に興味があるのですかな？」

「えっ！？ あ、はい、まあ……」

『この話』が、さっきジノラットが言っていた話だとあたりをつけたあたしは、戸惑いながらも頷く。もともとあたしの卒業のためにジノラットが持ってきた話だったんだ、興味がないわけがない。

（どんな成績でもいい、とりあえず卒業だけでも！）

できる可能性があるならば、あたしはすがりたかった。

自分はどんなにバカにされてもいいけど、両親だけはバカにされたくないから――。

そんな想いのあたしと、啞然とした表情のまま固まっているロディナを、交互に見つめた校長先生は、やがて「いいでしょう」と深く頷いて。

「国王陛下が求めている『いちばん強い魔符術』。きみたちふたりで力を合わせてつくってみなさい」

「!？」

当然顔を見あわせる、あたしとロディナ。

「発表大会までは七日間あります。そのあいだに完成させるのです。出場の申しこみは私のほうでしておきましょう。ただし、これも課外授業の一環ですから、制服で行動するようにしてくださいね」

すらすらと続ける校長先生に、耐えかねたのかロディナが口を挟んだ。

「待ってください校長先生！　ひとりずつではダメなのですかっ？」

校長先生のすべてを包みこむような視線が、再びあたしたちをとらえる。

それからこりと、目尻にシワを寄せて。

「ルーン同士です、きっと仲良くできますよ」

――なんの根拠もないのは、『癒しの大樹』だけではなかった。

【第1章】それぞれの理由―1

丸襟がかわいい真っ白なブラウスに、映える真紅のリボン。そして青が基調のタータンチェック・プリーツスカート。

（着てる制服は同じなのに、なんでこんなに違うのかなあ）

学校から西に延びる、林に囲まれた国道をふたり並んで歩きながら、あたしはそんなことを考えていた。

（ジノラットじゃないけど、遠目に見る分には良かったのよ）

でも隣に立たれると、外に向いていた憧れや羨ましが、内に向いた落胆や恥ずかしさに変わってしまう。

それでもさいわいだったのは、ロディナの中身が見た目ほど完成されていないこと。

そう、ロディナはまだ一言も、あたしと口をきいていなかった。

あたしがなにを言っても、だんまりを決めこんでいたんだ。

（性格が悪いなんて噂、聞いたことなかったんだけどな）

もしかしてロディナ、あたしのことが嫌いなのかな……？

無表情に覆われた横顔を見ながら、あたしは少し沈みこむ。

卒業できるチャンスをもらえたことも、密かに憧れていたロディナと一緒に挑戦できることも、あたしにとっては嬉しいことなのに、でもロディナに嫌われたまま進むとなると、話はまったく別だ。

雲のほとんど見えない空は高く、昨日よりも幾分落ちついた風があたしたちのあいだをすり抜けていく。あたしの視線は何度もそこを歩き来してしまうけど、ロディナの視線は相変わらずまっすぐに前をとらえたままだった。

道の両脇に伸びている木々を？

それとも、これから先に待っている想像もできない未来を？

「――なに」

「えっ？」

不意に、初めてロディナが唇を動かした。

「さつきからわたしのほうを、チラチラ見てるでしょ」

さすがに気づいていたんだ。そして居心地の悪さを感じたんだろう。

その声は低く、あからさまに機嫌の悪さが窺えたけど、あたしはチャンスだと思ってロディナの前に躍り出る。

「う、うん！ これからどうしたらいいかなって、相談しようと思
って」

集合場所も集合時間も、校長先生が勝手に決めて、あたしたちはそれに従っただけだった。今西に向かって歩いているのだって、なにか目的があつてのことじゃない。たまたま見送られたのが西門だったからだ。

あたしに行く手を遮られ、ロディナは歩く足をとめた。目を細めて、もう一度あたしの顔をとらえる。

「じゃあ訊くけど、リユーイー＝ルーン。『いちばん強い魔符術』には、なにが必要だと思う？」

「え？ っと……」

突然の問いに、あたしは言葉を詰まらせた。

それをつくらねばならないことになって、あたしだって昨日からずっと考えてはいたんだ。

（そもそも魔符って、魔力に命令を与えて自在に操作するためのもの、なのよね）

学校で習った歴史によると、昔々の古代人は誰もがあたりまえに魔力を持っていて、魔術は決して不思議なものではなかったという。でも時代が進むにつれ魔力を持つ人が減っていった、魔力を持たない人でも魔術を使えるようにするために、魔符が生まれたんだって。魔符に魔力への命令を織りこみ、魔力を持つ人——『魔力士』のハンコをもらうことで、そのハンコから繋がっている魔力士の魔力を借りて魔術を発生させるのが、魔符術の仕組みなんだ。

そして今現在、魔力士はこのアステイス王国内でも五人しかいない。でも魔符術そのものは、国中はおろか世界中に広く浸透してし

まっていたんだ。今さら魔符術のない不便な生活には戻れないって、各国は魔符をつくる技術を保存する試みを始めた。そのなかのひとつが、あたしたちの通うセルミア魔符術学校というわけ。

（だから、強い魔符術をつくるためには――）

まとめてきた考えを、少しずつ引き出しながらあたしは口をひらいた。

「魔力がすごく強い攻撃をしてくれるように、強力で正しい命令文を構築することと、すごく強い力を持った魔力士にハンコをもらうこと！　じゃないかな？」

あたしの、自分でもそうとわかるほどつたない言葉に、ロディナは口もとだけで「ふっ」と笑い。

「そうね、『優れた魔符』と『優れた魔力士』が必要ね」

それ以上ないくらい短い言葉でまとめてくれた。

思わずあたしは「ぐう」と唸る。

（さ、さすが文章構築の天才っ！）

現代語も完璧だわ！

魔符は通常、古代人が使っていた古代語で書かれる。魔符に古代語で命令文を書きこむことを専門用語で『織る』といい、古代語に精通していなければ思いどおりの魔符を織ることはできない。さらに、魔符の発動には魔力士のハンコをもらったあとでそれを読みあげるという行為も加わるんだ。つまり古代語を正しく読む力も必要で、「魔符術は難易度が高く技術の保存が難しい」と言われる所以はそこにあつた。

学校一の天才と言われるロディナは特に、その古代語による文章構築能力に長けていた。それは実のところ、現代語の文章構築とはなんの関わりもないことなんだけど、あたしにとっては『すごい』ことにかわりなくって、感心してしまったのだった。

「『優れた魔力士』はねっ、このまま西にまっすぐ行くと、『国一の魔力士』って言われてるガイトーチャードのお屋敷に着くの！　そこがいいんじゃないかしら」

ロディナの冷たい雰囲気にもめげず、校長先生から預かってきた『アステイス王国魔力士マップ』をひらきながら、あたしは提案する。そのマップには、国内に存在する五人の魔力士の現在地が記されていた。ついでに○×がついているのも気になるけど、意味がわからないから今はおいておこう。

ロディナはこのマップがすでに頭のなかに入っているのか、こちらに目を向けることもなくすぐに切り返す。

「ガイトⅡチャードのところまで、六マスもあるでしょ。歩いていたら一マス一日、往復で十二日もかかるじゃない。乗りものだってそうそう乗れるお金があるわけじゃないわ。宿泊代と違って学校からは補助が出ないしね。なに？　あなた、もしかして最初から諦めてるの？」

最初に世界地図をつくった人が、一日で歩いた距離の二乗が一マス。この世界ではどこでもそれが基準になっていて、マス目の境は視覚的にもわかるようになっていて。あたしたちのやや前方にもひとつ、淡い光で区切られたような境目が見えていた。

「ち、違うよっ、ちゃんと考えがあるから！」

焦ったあたしは、マップをロディナのほうに向けて無理やり見せてやる。

「ほらここ！　三マス先にもエイラⅡポットっていう魔力士がいるのよ。この人に、三マス移動できる魔符にハンコを捺してもらえれば、歩きでも往復六日で行けるでしょ！？」

「その魔符は誰が書くのよ」

「それはもちろん、ロディナが……」

「自分が」と言いたいところだったけど、あたしにそこまで高度な魔符を織る技術はない。だからこそ案だけでも出そうと、昨日から必死に考えていたんだ。

マップからふいと顔を背けたロディナは、大袈裟でわざとらしいため息をひとつつき。

「——まあいいわ。それ以外にも気になることはあるけど、他に方

法があるわけではないし」

よけいに気になる言葉を吐き出してから、あたしの横を通って再び歩きはじめる。

（うう、ロディナったらちよつといじわるだわ……）

でも、頼りになるのも頼りにするしかないのも事実で。あたしはすぐにその背中を追いかけていった。

（せめてこの、ぎくしゃくした空気だけでもなんとかならないかしら？）

あたしは盛りあげるのが得意なほうだけど、ここまで相手のノリが悪いとそれも難しかった。もしここにジノラットがいてくれたら、もう少しマシだったかなあ？——ううん、むしろ泥沼になりそうだわ。やっぱいいなくて良かった。

あたしがひとり思案するあいだにも、ロディナは会話など不要とばかりにどんだん歩いていく。

「ねえ、待ってよロディナ！ 急ぎすぎよ」

後ろを歩きながら声をかけてみても、足をゆるめる気配はない。

「そんなに急がなくても大丈夫よ。だって『優れた魔符』のほうはできたも同然じゃない？ 学校一の天才・ロディナ＝ルーンがいるんだもの！」

あたしが本気で期待して告げたら、今度はぴたりと足をとめたロディナ。くるりと鋭い動きでこちらを振り返ると、再び自分から口を動かした。

「わたしは、書かないわよ」

「——え？」

あたしがその言葉の意味を一瞬理解できなかったのは、なんだかんだ言ってもロディナ自身も本気で『いちばん強い魔符術』をつくらうとしてくれるだろうと、思っていたからだ。あたしが卒業をかけているように、おそらくロディナもなにかをかけている。だからこそ態度は頑なでも、協力はしてくれるだろうって。

（ロディナの魔符が、いちばんの近道だと思ったのに……）

勝手な期待ではあったけど、拒否されたのはショックだった。

「書いて、くれないの？」

自然と声も震える。

そんなあたしの様子にはさすがのロディナも表情を崩し、もてあましていた腕を組んで。

「協力しないとは言っていないわ。ただ、魔符はあなたが書いて。わたしが読みあげるから」

「へ？」

また妙なことを言い出す。

「あなたが読んだのを、あたしが織るの？　なんでそんな面倒なこと……」

正確に書き取るためには、正確なつづりを知っている必要がある。単語ならわかるけど語尾変換などに自信のないあたしに、それができるとはとても思えなかった。まして、ロディナの知識レベルのほうかはるかに上なんだ、書き取るにしても時間がかかるだろう。それよりなら、ロディナが自分で書きこんだほうがはるかに早い。

あたしはつい、疑問全開の瞳でロディナを見つめてしまった。

するとロディナは、

「じゃああなた、この魔符が読める？」

肩から斜めにさげた魔符専用のファイルブックから、一枚の魔符を取り出してあたしに渡してきた。

戸惑いながらもおとなしく受け取って、それに目を落とすと。

(えっ!?)

そのまま凍ってしまったのは、そこにまったく知らない言語が書かれていたからだ。

少なくともあたしには、そういうふうに見えた。

「――これ、古代語？」

「アオマ・シャオアラビコオスモライフレ（魔符・術炎よ、ささやかなる光であたりを照らせ）」

「！」

それは日常生活のなかで、最もよく使われる魔符だ。ランプに灯りをつけるときはもちろんだけど、料理をするさいの火種としても使われる。それくらい一般的な魔符術だった。

あたしはもう一度、手のなかに視線を落とす。その命令文が書かれていると思って見れば、かろうじてそう読めなくもないような気がしなくもない。

けど――

「あの……」

「わかったでしょ？ 恥ずかしい話だけれど、わたし、字がとても下手なの。だからあなたが書いてよ。じゃないと、魔力士たちだつて読めないわ」

少しだけ目を伏せて、ばつが悪そうにロディナは口にする。でもそれは、あたしにとつてはたいした問題ではなかった。

だからつい、言ってしまったんだ。

「なあんだ、そんなことね。気にしなくたっていいのに」

字が下手でも、ロディナの頭脳が優れていることにかわりはない。それに、魔符がちゃんと発動するなら字の上手い下手なんて、言ってしまえばどうでもいいことだ。

あたしは心からそう思っていた。

それでも羨ましいって。

――ロディナの手が素早く伸びて、あたしの手もとにあった魔符を掴んだ。

「そんなこと！？ そうね、あなたにとっては些細なことかもしれないわね。でもわたしにとっては、この世の終わりかと思うくらい大問題なのよ……っ！！」

「キッ」と至近距離であたしを睨みつけてから、方向転換したロディナは走り出す。まるで昨日と同じ場面をくり返しているようだった。

ただ、昨日と違うのは――

「ロディナ、待って！」

（怒らせちゃった!?!）

これまでは、無表情だったり機嫌が悪かったりしたものの、ひとつの感情をここまであらわにしたことはなかったロディナ。それが、今は明らかに『怒っている』とわかるほどの強い瞳を見せつけてきたんだ。

思ってもみなかった反応に、あたしもどこか混乱してすぐには動き出せなかった。

（ロディナ……）

もしかしたら、ラブレターの字が下手だったって原因で、振られたりしたのかしら？

そんな相手ならこっちから振ってやればいいのにと、あたしが勝手な妄想まで膨らませていると。

「――ふたりのルーン、たった一マスも持たずにケンカ別れ、か」

また昨日をくり返すかのように、突然後ろから聞こえたなじみのある声に、あたしは反射的に振り向いた。

「ジノラット!?! あんた、いつから見えたのよ?」

今日は左手首に包帯を巻いているジノラット。林の陰に隠れて見ていたのか、ニヤニヤ笑いを口もとに浮かべ、双眼鏡に手をあてて立っていた。

「まあこうなると思ったよ。おまえとロディナじゃタイプが違いすぎるもんなあ。ロディナが耐えきれないわけだよ」

わかったふうな口ぶりで話すジノラットに、あたしはだんだんと腹が立ってきて。

「うるさい!?! なによ、字が下手なくらいどうってことないじゃない。頭良いんだから、それくらいご愛敬でしょ!?! あたしなんて、あたしなんて……」

しまいには泣きたくなってきた。

（たとえ古代文字がうまく書けても、頭が悪かったら意味ないのよ おおっ!?!）

幼なじみにでもそんなに情けないところは見せられないと、あた

しは心のなかでだけ続きを叫んだ。

そんなあたしを見るジノラットの目が、なぜかキラリと光る。

「なんだおまえ、地雷、踏んじやったのか」

それから不意に表情を硬くして、目を細めた。

なんの話だか、あたしには全然わからない。

「地雷？ 踏んでないよ、踏んでたらとっくに死んでるでしょ？」

だいいち、この国に地雷なんて……」

「いやいやいやいや、本物の地雷じゃなくてさ。ロディナの感情が爆発するようなこと、言っちゃったんだな」

「なに？」

ジノラットがなにを言いたいのか、やっぱりよくわからなかった。ただジノラットは、いつも覗いている分ロディナのことに詳しいはずだったから、あたしは身体をまっすぐに向けてジノラットの続きを待つ。

ジノラットも、真似をするように姿勢を正してから。

「成績上位五名は、魔符術協会に卒業論文を提出しなきゃならないって、知ってるだろ？」

「うん」

そしてそれが認められないと、卒業できないということも知っていた。セルミア魔符術学校の卒業生代表として、それくらいの責任があるんだ。

「それがどうしたの？」

軽く訊いてしまったあたしは、

「ロディナの論文、『字が汚くて読めない』って理由で突っ返されたんだってさ」

その答えに後悔した。

「え——」

（だから……だから昨日、あんなに焦ってたんだ）

卒業できないかもしれないことに、強いショックを受けていたあたしと同じで。天才と呼ばれるロディナですら、なんの根拠もない

『癒しの大樹』にすがらねばならなかった。すがりたかった。

それくらい、追いつめられていたんだ。

「でも、そんなのおかしいよっ。ロディナの字は汚いんじゃないかって下手なんでしょ？　きれいに書いたって下手なものは下手じゃない？」

「……おいリユーイ。それがフォローだってのはわかるけど、話がこじれるからロディナの前では言うなよ？」

「なによー、事情通な振りしちゃって。わかってるけどさ、だって、内容は間違いなく素晴らしいはずなのに、かわいそうじゃない」

「だから今回のことで、国王に認められて論文を受け入れてもらうようにお願いするつもりなんじゃないのか？」

「あ、そっか」

内容に絶対の自信があるならば、願うのは卒業そのものではなく、論文の受理になるだろう。

（なんだ、ロディナだって充分に本気だったんだね）

『いちばん強い魔符術』を、絶対つくりだしたいと思ったからこそ、あたしに魔符を織ってほしいと願ったんだ。それなのにあたしは、深く考えないまま応え、ロディナを怒らせてしまっ——

「——うん、あたし、ロディナを捜して謝ってくるよ」

あたしたちに残された時間は、たったの七日間。それを有効活用するためにも、早めに関係を修復しておく必要があった。

「居場所はわかるのか？　なんなら俺がこの双眼鏡で捜して——」

「いいよ、自分で捜すから。距離的に考えたら、隣のマスの宿に泊まるしかないしね。片っ端から捜してみる！」

「そ、そうか」

おそらくジノラットは、なにか理由をつけてついてこようとしているんだ。でもそれに甘えるのは、きっと得策じゃない。

（あたしが自分で見つけなきゃ）

そうして謝らなければ、その謝罪に意味などないように思えた。

「ありがと、ジノラット。あんたもたまには役に立つのね」

そんな言葉を残して、今度こそあたしは走り出す。

「『たまには』はよけいだ！」

後ろから届いた声は、しかし少しも怒っているふうではなかった。

【第1章】それぞれの理由―2

結局あたしがロディナを発見できたのは、日付が変わる寸前のことだった。

しかもロディナはなぜか酒場において、顔をまっ赤にしながら大量の酒をあおり、くだを巻いていたのだった。

「どーせわたしは字が下手ですよおお。だからってなによ、いい大人がそれを理由に突っ返さなくってもいいじゃない!? それくらい根性で読みなさいよ! 学校の先生たちはみんな頑張って読んでくれているのよおおおっ」

「ロディナ……なにしちゃってるのよ……」

そのあまりの惨状に、あたしは言葉を失う。

ロディナの周囲ではたくさんの大人たち――やはり男性が多い――が無責任に盛りあがっているけど、ロディナ自身はずっと泣いていたのだろう、その目蓋はなかにものが入っているのかと錯覚するほどに腫れていた。

「お嬢さん、彼女の友だちかい？」

入り口で棒立ちになっていたあたしに、声をかけてきたのはエpsilonをしたひとりの男性、どうやらこの酒場のマスターらしかった。もともと垂れているのだろう目をさらに垂らして。

「だいぶ前からあんな調子なんだ。部屋は二階に用意してあるから、良かったら連れていってくれないかな」

「えっと……あたしも泊まっていいいんですか？」

「もちろん。請求は学校のほうにあげればいいんだろ？」

「あ、はい。そうです」

セルミア魔符術学校は国の機関であり、その在校生はいずれ国の未来を担う存在になる。そういう認識が国内に広く伝わっているため、制服で行動している限りはその恩恵を受けることができた。あたしたちが制服で行動していたのは校長先生に指示されたからだっ

たけど、それにはちゃんとした理由があったんだ。

お酒のにおいが充満した薄暗い店内を、あたしは一步一步ロディナへと近づいていく。

「お？ またまた制服の女の子が来たぞ。いやあかわいいねえ」

そのあいだにも酔っぱらいが絡んでくるけど、無視をして進んだ。当然のことだけど、あたしは酔っぱらいの扱いになんて慣れていない。ただ、絡まれると先が長いらしいことは、たまに酒を飲んでいたギヒシー（パパ）の姿を思い出せばわかった。

「おいおい、無視しちゃうのかい、ねーちゃん？ こっちの子は気持ちよく騒いでくれるのになあ」

ロディナの近くに座っている男が、気分が悪いのか伏せているロディナの肩に手を置いた。

「！ ロディナに気安く触れないでっ」

あたしは慌てて残りの距離をつめると、男の手を払いのけロディナの上半身を起こしてやる。

「ロディナ、しっかりして！ ほら、上で休もうよ」

「うーん、もう食べられな〜い……」

「なに言ってるのよ、ほら！」

仕方なく、ロディナの腕を無理やり自分の首の後ろにまわして、立たせてやった。

（ロディナがこんなになるなんて……）

普段のロディナは、おいそれと人を近づけないような雰囲気を持っていた。こんなふうに酔っぱらいに気軽に触らせることなんて、考えられないんだ。

（よっぽど傷ついているのね）

『天才だから』

『頭が良いから』

自分たちとは違うのだと、心のどこかで考えていたあたしは。それが間違いであったことを、今、強く感じていた。

「歩いて、ロディナ。さすがにあたしだけの力じゃ、上まで連れて

いけないからっ」

支えながら身体を揺すって、ロディナを起こそうと試みる。

(あら……?)

そのときあたしは、ロディナが左手になにかを握っていることに気づいた。細い鎖がこぶしから垂れているところを見るに、ペンダントだろうか?

やがてロディナは、その握りしめた手をそのまま上にあげ、甲でごしごし目をこすると。

「――あれ? リューイールン……なぜあなたがここに……?」

まだ頭はぼやけているようだけど、意識は少しはつきりしてきたみたいで、やっと自分でも足を動かしてくれた。

「話は部屋に行ってからよ。ほら、歩く歩く!」

あたしは必死にロディナを酒場から連れ出そうとする。

でもそこに、

「待てやねーちゃんたち、夜はこれから長いんだぜ? もう部屋に行っちまうのかよ」

「そーだそーだ! 酒場には華が必要だ!」

ロディナの退場を残念がる酔っぱらいたちが、容赦なく邪魔をし

てきた。

「あ、こら! ロディナ、お酒受け取らないのっ。置いてって!」

「ううーん」

「唸ってもダメ!」

ぐいぐい引っぱって、なんとかドアの前までたどりつく。

それでもまだしつこくロディナに絡んでくる酔っぱらいに、成り行きを見守っていたマスターが声をかけてくれた。

「そのへんにしておいたほうがいいですよ。彼女たちは、まだ勉強中とはいえ魔符を持っていますからね。我々が想像もつかないようなすごいものを隠し持っているかもしれないです。朝起きて大事なものが縮んでいたら、どうしますか?」

「うげっ!?!」

実際にはそんな魔符あるはずもないんだけど、みんな酒が入っているためその言葉で静かになった。

（今のうちにっ）

あたしはマスターにペコリと頭をさげたあと、ロディナを引きずるようにして酒場を出る。このあたりは夜の街なのか、まだ灯りのついている店が多く、それほど暗さは感じなかった。でもだからこそ、長居するとまた酔っぱらいに絡まれる危険性がある。

あたしは急いで左右を見まわすと、この酒場と同じ建物の横から階段が跳び出しているのを発見した。

（あそこから入るのかなあ）

「ロディナ、もう少し歩いて。頑張って！」

「う……ん」

眠くて仕方ないのか、完全に身体を預けそうになるロディナをなんとか励まして、階段のほうに近づいていく。木製のそれが必要以上に軋ませながら段をあがっていき、やっと最後までのはりきった頃、その先のドアが勝手にひらいた。

（えっ？）

「ご苦労さん。悪かったね、手伝ってやれなくて」

顔を出したのは、さっきのマスターだった。

それからはロディナを部屋まで運ぶのを手伝ってくれて、やっとあたしはすべての荷物をおろすことができた。

「私が彼女を部屋に連れていこうとすると、見てのとおり酔っぱらいたちが散々に絡んでくるものだから、なかなか連れ出せなかったんだ」

「だからお嬢さんが来てくれて助かったよ」と、苦笑したマスターは部屋を出ていった。

（そっか、そうよね）

男の人がひとりで女の子を部屋まで送り届けるなんて、ロマンチックで怖い出来事だ。酔っぱらいたちにとっては格好のからかい草になってしまいうだろう。

あたしはそこまで考えると、ベッドの上で気持ちよさそうに眠りはじめたロディナに目を向け。

「――良かった、無事で」
心から、呟いた。

（昨日までは、ほとんど赤の他人みたいな相手だったけど）

探ろうとして、ケンカして、弱みを見てしまつて。

自分が漠然と憧れていた存在とのギャップを感じて。

でもそれは幻滅の材料になるどころか、あたしが最初から見ようとしなかった、ロディナの人間らしい部分を見せてくれた。天才でも凡人でも、きつとみんな同じように悩んで、あがいているんだ。

（あたしたちは決して敵じゃない、力をあわせて難題に立ち向かう仲間なんだから）

――明日から、やりなおそう。
最初から。

そう決意したあたしは、ベッドのなかへともぐりこみ、意識を開放す準備をする。ロディナを捜して走りまわった一日だっただけに、眠りにつくのは早かった。

だから、

「……ヴァンさん……マリルゼさん……」

ロディナが寝言であたしの両親の名を呼んだような気がしたのも、夢か現実かわからなかった。

【第1章】それぞれの理由―3

いつも笑顔を浮かべ、すべてを受け入れるやさしさを持っていたギヒシー（パパ）・ヴァンディリスールン。

ときにはあたしを叱りつけ、善悪を厳しく教えこんでくれたバートチャ（ママ）・マリルーゼールン。

それは、世界を代表する古代語の研究者であったあたしの両親。

古代語研究の未来を憂い、積極的にセルミア魔符術学校へとおもむき、生徒たちに古代語の奥深さと味わい深さを教えこんでいたという。

（あたしもちゃんと教わりたかったな……）
思わずにはいられない。

あたしがふたりに古代語を教えてもらえたのは九歳までで、そこから先は自力で覚えるしかなかった。

ふたりはなんの前触れもなく、忽然と姿を消してしまった。

国王陛下をはじめ多くの国民が、国中ふた리를捜しまわってくれたけど、見つからなかった。やがて、どこかの国が強い魔符をつくるために連れ去ったのではないかという噂が立ち、それを耳にした国王は外部にまで捜索隊を派遣してくれた。

でもいまだに、ふたりは見つかっていない。

だからこそあたしは、いつかふたりが帰ってくる日を心待ちにしていたんだ。

笑顔であたしの前に現れてくれるのを。

手を伸ばして、「ちゃんと勉強しているか？」って頭をなでてくれて。

手を伸ばして、「卒業おめでとう」って抱きしめてくれる。

そんな両親を妄想していた。

絶対に卒業しなければならなかった。

できるのは単語問題だけで、応用力は微塵もないなんて悲惨な現

実を、知られてはいけなかった。

（あたしが両親の評判を落とすわけにはいかないのよ——！）

目が覚めたとき、あたしは自分の枕が濡れていることに気づいた。
最近ずっと見る事のなかったあたたかい夢。

……もしかしたら、かなしい夢。

さみしい夢。

それを、昨日今日と連続で見ている。

（プレッシャーのせいかな……それとも、ふたりがどこかで応援してくれてるのかな？）

わからない。

でもあたしのやる気を奮い立たせるには、充分な笑顔だった。

ふと、ロディナは起きただろうか隣のベッドに目をやる。

「えっ？」

あたしが思わず口に出してしまったのは、そこにロディナの姿がなかったからだ。掛け布団は少しも盛りあがっていないくて、まるで昨日誰も寝ていないかのようにシーツのシワも直されていた。

（ロディナ、どこに行ったのかな）

まさか、あたしをおいて先に行っちゃった？

と勝手に不安が募る。

（そういえばあたし、まだ謝ってない……）

謝ろうと思ってずっと捜していたのに、ロディナが酔っぱらっていてそれどころではなかったんだ。

あたしは急いでベッドから抜け出すと、身なりを整えた。いつもどおりに髪を高く結いあげ、大事なファイルブックを肩から斜めに提げる。

部屋を出る前に、ロディナの忘れものがないかとぐるり見まわして、

「……直しとこ」

忘れものはなかったんだけど、ロディナのベッドと比べて自分のベッドがあまりにも汚かったから、あたしはベッドのそばまで戻るとめくれた掛け布団を丁寧に戻した。

それから部屋を出て、昨夜はのぼった建物横の階段をくだる。

（お店に顔出したほうがいいよね。朝だけどあいてるかなあ）

下の入り口のほうにまわりこむと、昨日見た看板とは違う看板がかけられていた。どうやら、酒場なのは夜のあいだだけのようだ。

ドアに手をかけそつと押しこむ。「キィ」と、甲高い音が鳴った。店内がうるさかった夜はまったく気にならなかった音だけど、静かな朝にはまだ寝ている人たちが起きてしまうのではないかと思うほどに響いた。

その音に、カウンターに腰掛けていたひとりの人物が振り返る。

「！ ロディナ……」

つんとすましたロディナの顔が、そこにはあった。

（ちゃんと待っていてくれたんだ！）

たったそれだけのことなのに、あたしの口もとは自然とほころんでしまう。

駆け寄って行って、すすめられてもいないのに勝手に右隣の椅子に腰掛ける。

「おはよう、お嬢さん。朝食はできてるよ」

「えっ？ ああ、そういうつもりで座ったんじゃないけど……でもいただきます！」

「はっはっは。じゃあ少し待ってて、今出すから」

マスターの笑顔に微笑み返してから、あたしは横目でロディナの様子を窺った。

（ロディナ、顔色が少し悪いみたい）

もともと色が白くて、顔色が変わるとわかりやすいロディナ。昨夜はそれこそ絵に描いた太陽みたいな赤さだったけど、今日は死人のように青かった。しかしロディナ自身は必死にそれを隠そうとし

ているのか、平然とスープを口に運んでいた。もしかしたら、昨夜の醜態を恥ずかしがっている部分もあるのかもしれない。

でもあたしは結局我慢できなくて、

「あの、ロディナ？ 具合が悪いんだったら、無理しなくても大丈夫だよ」

声をかけると、ぴたりとロディナの手がとまった。

「――なんで、そんなことわかるのよ」

「えー？ だって顔色が悪いし、それに、眉間にシワが寄ってるのよ」

「！」

ロディナはさっと、スプーンを持っていない左手でそのあたりを隠す。

「やっぱり頭が痛いのかい？ 二日酔いか、それともスープがまずいのか、どちらかだろうとは思っていたがね」

どう見てもおいしそうにしか見えないスープを運んでいるながら、あたしたちの会話が届いていたんだろう、マスターがそう笑った。

ロディナは気まずそうに、左側の壁にかけてある絵画に目をやる。かわりに、少し赤みをおびた右の耳が主張していた。

「あ、あなたひとりで、なにができるっていうのよ」

「うん、できない」

「……は？」

マスターからスプーンを受け取りながら、あたしは正直に告白する。

今どん底にいることを自覚しているあたしには、ロディナのように取り繕うものなどなにもなかった。

「あたしが今できるのは、ロディナに命令文を構築してもらって、それを魔符に織りこんで、エイラにハンコをもらってくることでよ。

最初にロディナが協力してくれなかったら、なんにもできないんだ」
「あなた……」

今日初めて、ロディナがまっすぐにあたしの顔をとらえた。

そこにチャンスを見出したあたしは、スプーンを握りしめ熱をこめて伝える。

「ごめんなさい、ロディナ。あたし、『天才』と呼ばれるあなたには、あたしたちのような悩みなんてないんだって勝手に思いこんで、あっさり頼んであっさり断った。それなのにあなたが断ったことに勝手に腹を立てて、ひどいこと言ったわ。まさかあなたも、あたしと同じように卒業をかけているなんて思わなかったから」

「……………」

あたしの視線の先で、ロディナの瞳が少し揺れる。

「でも今は、一緒に卒業したいと思ってるの。だからね？ 昨日のことは忘れて、今日からまた改めて始めるっていうのはどう？ あたしは夜のことを忘れるから、ロディナは昼のことを忘れて！」

ロディナの頬に一瞬朱が走ったのは、昨夜の自分を思い出したからだろうか。

「——ずいぶん、勝手なことを言うのね」

それだけ呟いたロディナは、再び前を向きスプーンを動かしてはじめる。

「ロディナ？」

「その話、のってあげるわ。でも、ここを出たあとからね」

「！ ええ！」

許してくれるらしい。

（そうと決まれば、急いで食べちゃわないと！）

あたしもスープに向かいはじめた。

追加で運ばれてきたパンとサラダにも手を伸ばしながら、作戦会議は続いていく。

「それで？ わたしはどんな命令文を構築すればいいのよ」

「そうね、とりあえずロディナと一緒にエイラのところまで行ければいいんだから、あたしが先にエイラのところに行ったあと、そこからロディナのところに戻るための一枚と、ロディナと一緒にエイラのところに戻るための一枚ね」

「二度手間だわ」

「いいのよ、体調悪いのに無理することないんだから」

「わたしなら大丈夫よ。無理して動くことには慣れてるから」

「え？」

「それにね――」

ロディナはそこで一度とめると、チラリ上目遣いにマスターを見てやっ

「マスターには悪いけれど、眉間のシワはスープの味のせいよ」

「あちゃー」

大袈裟に頭を抱えたマスターがおかしくって、あたしはつい笑ってしまったのだった。

【第1章】それぞれの理由―4

あたしたちがエイラⅡポットの屋敷へとたどり着いたのはそれから二日後、学校を出てからちょうど三日後のことだった。

「うわー、立派なお屋敷」

あたしが思わず声をあげると、ロディナが「恥ずかしい子……」と呟く。

あたしの背丈の三倍ほどもある格子門の隙間から、それは見えていた。普段見慣れているセルミア魔符術学校の校舎より大きく、しかしそれほど古くもない、美しく整備された豪邸。門から屋敷までの距離は長く、そのあいだには整然と並んだ花々が揺れ、客人の来訪を歓迎しているかのようにだった。

格子門の両脇には槍を手にした兵士がふたり立っていて、あたしたちをジロジロと眺めている。頭を覆う防具に国紋が見えるのは、魔力士はみんな国の宝だからだ。

「きみたちはセルミア魔符術学校の生徒だね。どうしたんだい、こんなところまで」

門の右側にいた兵士が声をかけてきた。

そちらに近づいていったあたしは、まだハンコの捺されていない魔符を二枚取り出して。

「エイラさんに、ハンコをもらいに来たんです！」

「ハンコを？ 学校用のおつかい？」

「違います、わたしたちが個人的に使うものです」

補足したのはロディナだ。

するとふたりの兵士は顔を見あわせ、頷きあう。

「捺すかどうかの判断は、エイラさまが直々に行う。まずはその魔符を見せてもらおう」

「はいっ」

普段王国直属の兵士となんてあまり接する機会のないあたしは、

ひどく緊張して手のなかの魔符を差し出した。その魔符は、ここに来るまでの二日間で、ロディナと協力し織りこんだ三枚のうちの二枚だった。

受け取って、さっと目を落とした兵士は、

「ほう、きれいに書いてあるな」

まずそう褒めてくれた。

それから、

「これ、本当にきみたちが書いたのかい？」

書かれている内容にも驚いてくれた。

その反応が気になったのか、もうひとりの兵士も近づいてくると、その手もとを覗きこむ。

「ふむ、三マス先、と書いてあるのかな。もしかして、本当の目的はガイトさまのところか？」

「そうなんです。でも時間制限があるから、良かったら協力してもらおうと思って……」

「ああ、陛下が探しているアレをつくるつもりなのか」

ふたりの兵士はもう一度顔を見あわせると、思わせぶりな様子で魔符を返してきて、再び門の両側に戻ってしまった。

（あら？）

それからおのおの、腰にさげているファイルブックのなかから一枚の魔符を取り出し、宙に掲げる。

「アオマ・レッヴィジパイネイオエイラゲー！（魔符術・門よ、エイラの名において来訪者を通せ！）」

（！）

そろって読みあげられた古代語に、反応した魔符は輝き、その光が格子門へと伸びていった。

「あ……！」

そして門の中心に描かれた、光の輪。

「さあ入きなさい。この、決してひらかない門に」

兵士の言葉に促され、あたしとロディナも頷きあってから、光の

輪をぐり抜ける。

その瞬間ずんと重くなった空気に、あたしは魔力士の存在を実感した。

（エイラさんはもう、ほとんど魔力の残っていない低位の魔力士って言われてるのに）

これほどの力を感じるなんて――。

そう、魔力士の持つ魔力は、無限のものではないんだ。そもそも、どういう基準で魔力を持って生まれてくるのかもわかっていない。ただ、魔力を持つ人は普通の人間に比べ成長・老いが遅く、また、圧倒的な美しさを有していた。そのためある程度早い段階から魔力士として保護されることが多く、そうして国王のもとに入った魔力士たちは、魔力の強さによって役目を振り分けられている。

たとえば、ガイトⅡチャードのように強い魔力を持った高位魔力士は、国を守り維持するために使われるような魔符を託されるし、逆にエイラⅡポットのように魔力の弱まってしまった低位魔力士は、国民が普段使うような威力を求められない魔符を託されるんだ。

だからこそあたしたちも、エイラに『いちばん強い魔符術』のハンコを捺してもらおうとは考えなかった。エイラはアステイス王国内にいる魔力士のなかでは、間違いなく最も力の弱い魔力士だったからだ。

それでも全身にぶつかってくる空気の重さ・圧力には、ロディナも意外だったようで目を大きく見ひらいていた。

「まっすぐに歩いていくといい」

後ろからかけられた兵士の言葉を頼りに、強風のなかを歩くような足取りであたしたちは進む。

（風なんて吹いてないことは、周りの花を見ればわかるわ）

花は美しいまま、あたしたちの足もとで笑っていた。ロディナの長い黒髪も、歩くことで揺れているだけ。

（気楽に「ハンコを捺してもらえばいい」なんて考えてたけど）

「捺してくれるかなあ、ハンコ」

あたしが怖じ気づいて呟いたら、すでに無表情の仮面をつけなおしていたロディナは。

「頼んでみるしかないわ」

そう答えると、先に歩み出て屋敷の扉に手をかけた。

（こういうとき、頼りになるなあロディナ）

この屋敷を見ても全然驚いてなかったみたいだけど、やっぱお嬢さまなのかな？

その後ろ姿にすがりつくようにしながら、どうでもいいことを考えるあたしの目に、複雑な模様を織りこんだ赤い絨毯と輝くシャンデリアがまぶしい、外観から想像したとおりの玄関ホールが飛びこんでくる。中央には二階に続く幅の広い階段があって、その手すりに施された彫刻がまた、めまいがするほど細かくすばらしいものだった。

「うわあ……」

キョロキョロとあたりを見まわすばかりで、足を動かせないあたしをおいて、ロディナは堂々と踏み入っていく。

そのまま、階段に足をかけた。

「ちょ、ちよつとロディナ！？ 勝手にあがっていいのっ？」

あたしが慌てて声をかけると、ロディナは優雅な動作で振り返り。

「あそこに、『ハンコをご希望のかたは二階正面の部屋へどうぞ』って書いてあるから」

すつと、上方を指差す。

「え？」

その指先を追って視線を動かすと、シャンデリアからのびている銀色の鎖の先に、確かにそういう内容の紙がぶらさがっていた。

（シャンデリアの大きさにびっくりして、視界に入ってたわ……）

その美しさもさることながら、「落ちたらどうするんだろう」とか、「どうやって支えているんだろう」とか、そういうことが気になって仕方がなかったのだった。

あたしが納得したのを確認したロディナは、前を向き再び階段のぼりはじめる。

「あ、待ってよロディナっ」

入っていくのも恐れ多いが、おいていかれても困るあたしは心を固めてあとを追った。

そのとき、走ったのがいけなかった。

「きゃあっ!？」

毛の長い絨毯にまったく慣れていないせいで、豪快に転んでしまったんだ。

突然の悲鳴にまた振り返ったロディナは、潰されたヒキガエルのようになっているあたしを目にして、思い切り眉をひそめた。

「……あなた、転ぶならせめて階段の上にしてちょうだいよ」

「うう、だつてーっ」

「結構がさつで大雑把なのに、なぜあんなに古代文字をきれいに書けるのか、理解できないわ」

続けて悪態をつきながらも、せっかくのぼった階段をおりてきてくれるロディナ。

そう、あたしは古代文字をきれいに書くのが得意なんだ。それは多くの単語を知っている以外に、唯一褒められる部分だった。

「正確に書かないと、バートチャ（ママ）に手を叩かれたのよ」

痛みをこらえて、あたしはやっと上半身だけ起こしながら答える。結局階段のいちばん下まで戻ってきたロディナは、手を差し伸べてあたしが立ちあがるのを手伝ってくれた。

「ありがとう」

素直にお礼を口にすると、すいと視線を外したロディナはかわりに口を動かす。

「『バートチャ』って、お母さんのこと？」

「そう、ちなみにお父さんは『ギヒシー』よ」

答えた瞬間、ふたりのことを思い出して切なくなった。

同時に、

（そういえばロディナ、寝言であたしの両親の名前呼んでたっけ？）
そのことを思い出して、訊いてみようかと思ったんだけど。

「……わたしも、呼んでみたかったな……」

「え？」

ロディナがあまりにもさみしそうに呟いたから、訊き返すので精一杯だった。

するとロディナはなぜか、怒ったような口調で。

「なんでもないわ！ ほら、早く行くわよ」

「わっ、そんなに引っぱらないでよロディナ！」

あたしを引きずるようにして、再び階段をのぼりはじめる。

（どうしたのかな？）

考えながら、必死についていきながらも、あたしの目はいつい階段の側面にまで丁寧に施された模様に向いてしまう。おかげでそのあとも、何度か転びそうになった。ロディナが手をつかんでくれたのは、ある意味正解だったかもしれない。

長い階段をのぼりおえると、前に見えたのはこれまた豪勢な装飾に彩られた扉だった。

さすがのロディナも気圧されたのか、ノックをしようか迷う仕草をしていると。

「――入りなさい」

内側から声が届いた。まるで十日くらい休まずに喋りつづけたような、ずいぶんとしやがれた声だった。

あたしとロディナは、自然と目をあわせる。本当に自分たちに言われたのかどうか、確証がないため簡単にはひらけなかったんだ。するとまた。

「入りなさいと言っておろうがっ」

少し怒気を含んだような声が飛んできた。

「はっ、はい！ 入りますっ！！」

とっさに答えたのはあたしだ。

ロディナはそんなあたしに一度頷くと、扉にかけていた手をゆっ

くりと押し出す。

――が、扉はなかなか動かなかった。

「ロディナ？」

「この扉、すごく重いわ」

力をこめているからだろう、顔を歪ませて答えたロディナに、あたしも慌てて。

「て、手伝う！」

ふたりがかりでなんとか押しあげた。

（これ、いくらなんでも装飾つけすぎじゃない！？）

相手が魔力士でなかったら、思い切り怒鳴っていたところだ。

せめて目でアピールしようと、あたしはきつく部屋のなかを睨みつけたけど、そこはひどくがらんとしていて、最奥に備えつけられた簡素な椅子にひとりの老婆が座っているだけだった。

思い切り拍子抜けしたあたしの横を、ロディナがすいと通りすぎていく。

（そうだ、無駄に脱力してる場合じゃない！）

あたしも背筋を伸ばして、ロディナのあとに続いた。

最奥の老婆は、部屋の外にまで届く声を発せられたのが信じられないほどやせ細っていて、ひどく小さな姿をしていた。骨に皮をかぶせただけ、と形容しても間違いではないその姿は、異様で、恐ろしくさえ見えた。

（この人が、エイラⅡポット……？）

『国民のための細かな魔符にハンコを捺している人物』って言うから、もっとやさしそうな人だと思っていたのに。今日の前にいる老婆は、結いあげている髪の毛のせいだけではないつりあがった目と、耳もとまで届きそうなほど大きな口が印象的で、どちらかと言えば物語によく出てくる『意地悪おばあさん』みたいだった。服装だつて屋敷ほど立派なものでなく、それこそそのへんにいる普通のおばあさんが着るような、地味な色のシャツにズボンをあわせたみすばらしい格好だった。

若く美しかった頃の面影はもはやほとんど見られず、こちらに向けられる眼力だけがやけに鋭い。

(こ、怖いよーっ)

思わずロディナの後ろに隠れて、袖をつかんでしまったあたしを、ロディナは一瞥しただけで振りほどかなかった。それどころか、あたしの手もとから魔符を奪うと、一歩前に歩み出て。

「エイラⅡポットさん、ですね。この魔符にハンコを捺していただきたくて、寄らせてもらいました」

まったく怖じ気づいた様子もなく、交渉を始める。

(ロディナ、すごい!)

学校でも先生たちと対等に渡りあっているせい、言葉によども戸惑いもなかった。

そんなロディナと隠れているあたしに、なめまわすような視線を這わせたエイラさんは、やがて――

「おぬしら、セルミア魔符術学校の生徒じゃね?」

(……え? あれ?)

「こんなところによく来たねえ。あそこの学校で使っちよる魔符も、わしがつくってるんじゃない!」

厳格で怖そうな雰囲気を一瞬にして思い切り壊したエイラさんは、糸のように細めた目で自慢げに胸を張ったのだった。

(え、えーと……)

あたしはその流れについていけない。

しかしロディナは相変わらずなよう。

「そうですか、いつもお世話になっています」

ペコリとそう頭をさげてから。

「捺していただきたいのはこの魔符です」

思い切り話を戻して、魔符を手渡すために歩き出した。

袖をつかんでいたあたしはとっさに手を離し、ロディナの後ろ姿を見守る。

――と。

（あ……ロディナの脚、震えてる？）

少し離れて初めて、気づいた。

屋敷を見たときも、入ったときも、エイラさんを見たときも、近づいている今も。常に平気であるように見せていたロディナ。

でもそれは、決して怖くないからではないのだと。

（強がりなロディナ）

たとえ具合が悪くても、平気だと言った。

その言葉に、態度に、騙されてはいけないのは。

（今いちばん近くにいて、あたしなんだ……！）

気がついたあたしは数歩進み出て、ロディナの手もとから魔符を奪い返した。

「えっ!？」

驚きの声をあげたロディナの横をそのまま通りすぎ、エイラさんの正面へ。

「お願いしますっ!!」

拝むように頭をさげながら、あたしは二枚の魔符を差し出した。

「ほっほっほ」

不敵に笑いながら、それを受け取ってくれたエイラさん。

すぐに片目だけひらいて魔符に目を通すと、あたしたちを順番に比べるように見やって。

「ふむ、面白い組みあわせじゃのう」

魔符に対することなのか、人に対することなのか、判断に迷うことを呟いた。

それから。

「ガイトのところへ行くのか？ 魔符が二枚なのは、行きと帰り？」
まだ近くにいてあたしに顔を寄せて訊いてきたから、逃げ出した
い気持ちをぐっところえて答える。

「そ、そうですっ。国王陛下が探しているという、『いちばん強い
魔符術』をつくるために！」

魔符は一度使うと消えてしまうから、二枚必要だった。また、向

かう方向が違うというのもある。

エイラさんは一度軽く頷いたあと。

「じゃが、その発表大会の会場は城じゃろう？ おぬしら、城と同じ中央にある学校から来たならわかちよると思うが、ガイトのところから城までは六マスもあるじゃろう。『減力の法則』がかなり影響するじゃろうて、思ったほどの魔力は得られんはずじゃ。ついでにわしのハンコじゃって移動は三マスがぎりぎりじゃから——」

「わかっています。もともと一枚はここからガイトⅡチャードのところへ、もう一枚は、ここに戻ってきてから学校まで帰るために、使うつもりでした」

続けたのは、あたしの隣までやってきていたロディナだった。

(え？ えっ？)

二枚目を、ガイトさんのところからここまで飛んでくるために使うつもりだったあたしには、ロディナの言っていることがよくわからない。

「えっと……そもそも『減力の法則』ってなんだっけ？」

あたしも聞いたことはあったんだ。ただそれが関係するのは、魔符を使う側であって織る側ではないから、あまりきちんとは覚えていなかった。それは、あたしの将来の夢が『魔符術士』じゃなくて『魔符職人』になることだったからなんだけど。今回の『いちばん強い魔符術』をつくるという試みには魔符術を行使する部分も含まれているから、それも重要な問題になってしまいうらしい。

「ほっほっほ。さすがに『成績が良いほうのルーン』はよくわかっておるようじゃの」

「！」

自己紹介するのを忘れていたにも関わらず、エイラさんの口から発せられたロディナのあだ名。さすがのロディナも驚きを顔に表すと、「はっ」と息を呑んで。

「……そういえば、先ほど学校で使っている魔符もここでつくっていると、言っていましたものね」

「あ、そっか」

（だから情報も入ってくるんだ）

からくりがわかって、少し落ちついた。

普段魔力士との接点なんてまるでない生活をしているだけに、魔力士が本当はどんな力を持っているのか、あたしは理解していなかった。エイラさんのちょっとした言葉や仕草に動揺してしまうのは、そのせいもあるんだ。

同じように息を吐いたあたしたちを見やって、エイラさんはニヤリと笑う。

「いいじやろう、ハンコを捺してやる。ただし！ ロディナールンはリユーイールンに、『減力の法則』の説明をきちんとするんじゃない」

「……わかりました」

コクリと頷いたロディナに、今度は満足そうに微笑んだエイラさん。それから左手を掲げて、親指の先を器用にくるくるとまわすと、指先の下からなんとハンコが現れる。

（うわあ、魔力士のハンコって、指に直接ついてたんだ！？）

これまでハンコが捺される瞬間を見たことがなかったあたしは、その不思議な光景に強く惹きつけられた。横を見るとロディナも、興味深そうにエイラさんの動作を見つめている。

エイラさんが右手に持った魔符に左手のハンコを押しつけると、魔符は一瞬青白い光に包まれた。その光は、あたしたちがこの屋敷に入るとき門のところで見た色と同じで、あたしはそれがエイラさんの魔力の色であるのだと理解する。

同じ動作を二度くり返し、エイラさんの手もとは完成した二枚の魔符が。

「ほれ」

左右に一枚ずつ持ち、それぞれ差し出したエイラさんに、あたしたちは戸惑いながらもゆっくりと手を伸ばした。

「ありがとうございます！」

「ご協力、感謝します」

そしてそれぞれに礼を述べると、エイラさんは齒ぐきを見せるような笑いを浮かべて。

「ほんに、おぬしらは正反対じゃのう。ま、そのほうが仲良くやれることもあるうて。せいぜい頑張るこっちゃ。わしははしやぎすぎて疲れた、さっさと帰りな」

「はいっ、失礼しますー！」

「さようなら」

最後までそろわない返事をして、あたしたちは逃げるようにその部屋をあとにした。そしてあけるときも重かった扉を、臭いものにふたをするかのごとく懸命に閉じようとする。

やっと完全に扉が閉まった頃には、ふたりして肩で息をしていた。

「はっ……はあ……なんか、すごく疲れた……」

あたしがぐったりと告げると、ロディナも珍しく、

「同感」

と呟き、扉を背にして倒れるように座りこむ。

「さすが魔力士、というしかないわね。あの妙な圧力だけでもすごいのに、なに？ ああのわけのわからない雰囲気は」

「ぶっ」

あまりに容赦のないロディナの表現に、あたしも隣に座りこみながら笑ってしまった。

「怖いんだか明るいんだかやさしんだか、確かにわかりづらかったね。『と』がたまに『ちょ』になってるところは、なんかかわいかったけど」

「聞こえちよるぞ！ さっさと行かんかっー！」

「きゃあっ」

扉の向こうから飛んできた怒声に、あたしは驚いて跳びあがる。

まるでこの扉自体が震えたかのような、やはり圧力のある声だった。「ここじゃ休んでられないみたい」

肩をすくませてから、まだ座ったままのロディナに手を差し出す。

「行こ？」

ロディナは数秒その手を見つめたあと、なぜかあたしの顔をもう一度見てきて。

「つかもうとしたら、引っこめたりしない？」

「えー？ ジノラットじゃないんだから、そんな意地悪しないよ」
「そう」

安心したようにひとつ息を吐き、それからやっとロディナはあたしの手を取った。

（ロディナ、なんか嫌な思い出でもあるのかなあ）

考えながらもぐいと腕を引いて、ロディナが立ちあがるのを手伝う。それでもなんとなく訊き出しにくいのは、ロディナがあたしに對してまだ完全に打ち解けているわけじゃないのだと、はっきりと感じているからだった。

立ちあがったあとさつと手を離れたロディナは。

「落ちないでね、階段から」

ひとつ釘を刺したあと、先におりていく。

（多分心配してくれての言葉だっていうのは、わかるんだけど）
できることなら、あたしはもっと仲良くなりたかった。

「平気よっ、あたしは手すりを滑っちゃうから！」

その背中に投げて、階段の端にある手すりに飛び乗る。やたらと細かい彫りものがあるせいであまりスピードは出なかったけど、普通に階段をおりているロディナよりは早く下に着き、ロディナを下から見あげる形になる。

「ねえロディナ、『減力の法則』のこと、教えてよ」

「ああ——そうだったわね」

それはエイラさんがハンコを捺す条件にも出していた。

応えたロディナは階段の途中で足をとめると。

「ちようどいいから、ここで説明するわ」

まっすぐ下にいるあたしを見おろす。

「いい？ わたしがいるこの六段目をガイドⅡチャードの屋敷があ

るマスとして、あなたがいるいちばん下をお城や学校のあるマスとするわ」

（あ、それなら確かにわかりやすいかも）

あたしはおとなしく頷いた。

「『減力の法則』というのは、ハンコを捺した魔力士から一マス離れるごとに、魔符に届く魔力の強さ——つまり魔力値が減っていくことを言うのよ。魔符がわたしと同じ段にいるうちは、最高に強い状態を保てるけれど、この段から離れていくに従って力は弱まっていく」

「えっと……それじゃあガイトさんにハンコを捺してもらっても、お城までの距離ではあまり強い魔力を期待できないってこと？ あ——」

自分でそう口にしてから、エイラさんが似たようなことを言っていたのを思い出した。

（さっきのこういう意味だったんだ……）

「当然同じことはエイラIIポットのハンコにも言える。彼女はさっき、『自分の力では三マスが限界だ』と言っていたでしょう？」

「うん」

ロディナは三段分だけおりてくると、再び足をとめた。

「それはつまり、彼女がいるこの同じマスからでは三マス分飛べるけれど、他のマスからではそれほど飛べないと言うこと。まして限界の三マス先からであれば——」

今度こそ下までおりてきて、さらに一歩だけ、先へ進んだ。

「きっとこのくらいしか飛べないはずよ。そんな状態で使うのはもったいないじゃない？」

「そっか！ だからフルパワーで使えるこのマスまで戻ってきてから、学校までの三マスを戻ろうってことだったのね」

丁寧に説明してもらったおかげで、あたしにもやっと理解できた。（あたしが『減力の法則』を覚えてなかったのって、もしかして理解を諦めてたからかなあ）

ふと、そんなことを思う。

「日常的に使われている火や水の魔符は、魔力値が『一』に設定されているみたいだから増えようも減りようもないのだけだね。『いちばん強い魔符術』を目指すなら、そこは考えなければいけない問題よ」

「！もしかして、最初にロディナが『気になることがある』って言ってたのって、このことだった！？」

思い出して声をあげたら、外へ向かって歩き出していたロディナは足をとめ。

「――忘れるって、約束だったでしょう？」

「そ、そうだけど、ロディナが最初からそのこと考えてたんだと思ったら、感心しちゃって……怒った？」

振り返らないで告げたから、あたしは心配になって問いかけた。

「別に、怒りはしないけれど」

返すロディナの声は、やはりどこかつっけんどん。

「ロディナっ」

前にまわりこんで、顔色を見てみたら――

（え……？）

ロディナは確かに怒ってはいなかった。

ただ顔を赤らめ、自分の足もとを見ていた。

（照れて、るの……？）

あまりにも意外な状況に動けないでいると、当のロディナは必死にあたしと目をあわせてきて。

「わ、悪いけど、あなたに褒められると、どこかむずがゆいのよ。だからあんまり褒めないでちょうだい。むしろけなして」

とんでもないことを言い出したのだった。

【第2章】何度でもー1

エイラさんからハンコを捺してもらった二枚の魔符のうち、あたしが受け取ったほうの魔符を使用し、あたしたちはガイトⅡチャードのいる三マス先まで飛んだ。

——飛んだというよりも、正確には運んでもらったんだけど。

「ああ怖かった……良かった、途中で落ちなくて」

やっと地面におりることができて、あたしは心から呟く。

あたしたちが相談して織った魔符の内容は、『コントウウェオウイザツキヤシヤバスリマバー（鳥よ、その輝ける翼で西へ三マス導け）』。それを口にしたとたん、魔力でつくられたまっ白に輝く鳥があたしたちを足（爪？）で器用につかまえ、そのまま飛んできたのだった。

「てつきり背に乗せてくれるのかと思ったわよね」

最初に案を出したロディナにも予想外なことであったのか、そう口にしたあと。

「まあ、ちゃんと目的地の近くには来られたから、良かったけれど」

「あ、ほんと？」

続けたロディナの言葉に、あたしはキョロリとあたりを見まわした。

左手に隣のマスとの境界が見えるほど、マスの端のほうにやってきたらしい。周囲にはぽつぽつと古い民家が建っているだけで、あとは雑草が伸び放題の更地ばかり。さらに西の奥には小さな森のようなものが見え、その一部に尖った屋根のてっぺんが顔を覗かせていた。

（あのちょっとだけ見えてるのが、ガイトⅡチャードのお屋敷なのかな）

あたしは例のマップを取り出して、位置確認を——しようとしたのだけど、そもそも今自分がいる位置もわからなかった。

「ねえロディナ、今あたしたちがいるのって、このマス内のどのあたり？」

ロディナならわかるだろうかと、マップをロディナのほうに向けて訊いてみる。

案の定ロディナはあっさり「ここよ」とマスの中心あたりを指差した。

ついでに、

「あなたマップを持っていたから、てっきりわかっていると思っていたわ」

半分呆れたような言葉まで。

「飛んでいるあいだどこを通ってきたのか、見ていなかったの？」

「怖くて見られなかったのよ！」

（むしろ、ロディナったらよくずっと目をあけていられたわね！）

あたしにはそのほうが不思議だった。これもロディナの強がりの一種であるならば、本気で尊敬してもいいと思うしまうほど。

「自分が高所恐怖症だったなんて、今日まで知らなかったんだから

……」

「じゃあ今から、帰りの覚悟もしておくことね」

そう、エイラのところから学校に帰るときも、同じ魔符を使う予定なのだった。

「もうっ、ロディナのいじわる〜！」

「ふふ。さあ、さっさと用事をすませてしまいましょ」

ロディナはなぜか機嫌が良いようで、軽い足取りで森のほうへと足を向ける。

（ロディナってもしかして、高いところ好きなのかなあ）

あたしと逆な部分が多いみたいだから、そうなのかもしれない。ひとり肩をすくめてから、あたしは駆け足でロディナを追っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721z/>

ハンコくださいっ！

2011年12月17日12時55分発行